

# 平城宮跡第195次南区・第197次西区発掘調査の概要と二条大路南側溝出土木簡等について

1989年3月18日  
 奈良国立文化財研究所  
 平城宮跡発掘調査部  
 佐川正敏

## 1. 調査の経緯

奈良そごう建設に対する発掘調査は、敷地面積約4万㎡のうち3万㎡を調査対象として1986年10月から開始した。これまでの7次にわたる調査で2.8万㎡の調査を終了し、成果はそのつど公表してきた(図2)。

奈良そごう建設地が平城京の中で占める位置は、北を二条大路、東を東二坊坊間路、南を三条条間路、西を東一坊大路に囲まれた、左京三条二坊一・二・七・八坪にあたり、この4坪をほぼ含んでいる(図1)。

今までの調査の結果、奈良時代のこの宅地の基本的変遷がほぼ明らかになった(図4)。A期：奈良時代前期において少なくとも4坪を一つの邸宅として使用していたこと、B期：奈良時代中期において坪境小路(坪の間を分割する道路)が設置され、1坪毎に土地を使用していたこと、C期：奈良時代後期前半において再び少なくとも4坪を一つの邸宅として使用し、D期：奈良時代後期後半において再び坪境小路が復活することがわかった。とくにA期の大邸宅内には建坪340㎡の正殿風建物をはじめとする大規模な建物が堀や通路で区画されながら建ち並んでいた。これらの区画は二、七坪に跨る正殿風建物、双堂などからなる中枢ブロック、一坪の西北ブロック、八坪の東北ブロックに大別される。また、二条大路に面する北門と東二坊坊間路に面する東門が発見された。しかも、出土した木簡から、この邸宅に天平元(729)年2月12日に悲劇の死を遂げた長屋王、吉備内親王等が住んでおり、様々な家政機関があり、たくさんの人々が働いていたことが判明した。

さて、2月15日から開始した第195次南区(500㎡)、第197次西区(1000㎡)はいずれも既調査部分には含まれている。調査の目的はA期：長屋王邸の北西ブロックの性格とB期以降の一坪の利用状況の解明、八坪北の東西に続く二条大路南側溝(現在第200次調査として継続調査中)に対応する溝が一坪北でも検出でき

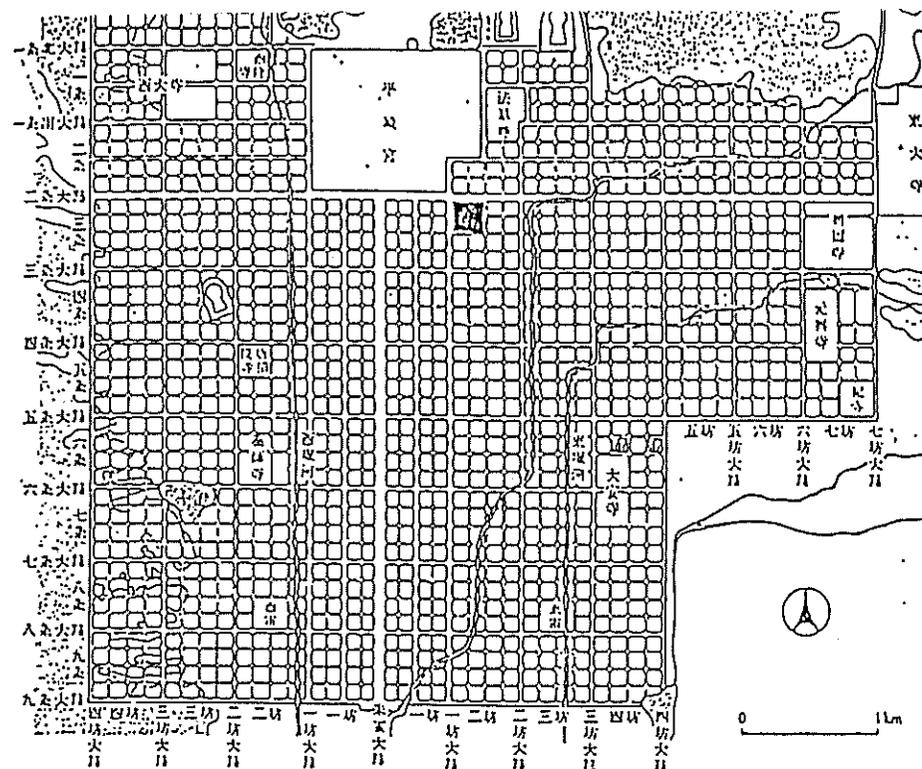


図1 調査地位置図

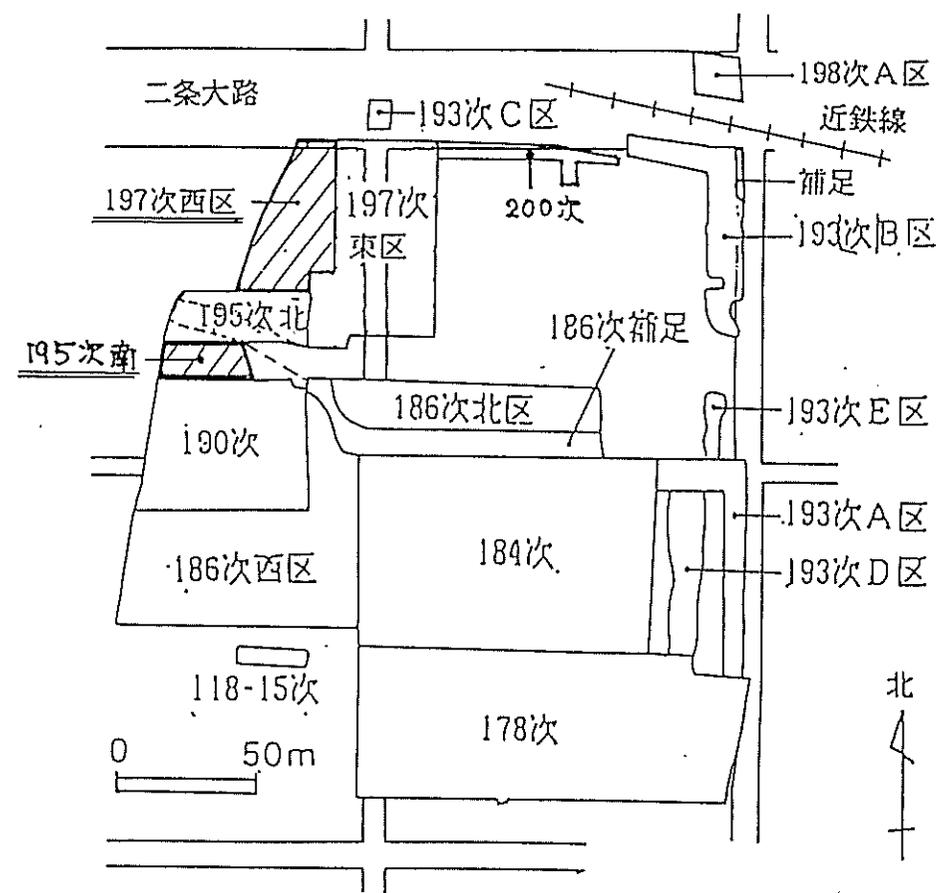


図2 調査区位置図

るか、などである。本日はこれらの調査の成果と二条大路南側溝出土の木簡（193次B区、197次東区出土分）、その他の若干の遺物について報告する。

## 2. 発見された遺構の概要

第195次調査、第197次東区の調査で検出した遺構は掘立柱建物12棟、掘立柱塀3条、道路2条、溝4条（主要なもの）、井戸5基（抜取り痕を含む）である。これらの大半は奈良時代の遺構であるが、平城京遷都後の遺構もある。

### ①奈良時代の遺構

A期（奈良時代前期）：一坪と八坪の間に坪境小路がない、一・二・七・八坪を一つの邸宅としていた時期。邸宅北辺には、二条大路に面して東西の築地塀（築地塀）が設けられ、その南北に雨落ち溝をもつ。197次東区で発見された北門へは邸宅中樞ブロックから幅13.5m（45尺）の通路が延びている。この通路は186次調査で検出されたL字形通路の北の延長部分にあたる。通路の両側には掘立柱塀が南北に延び、邸宅北部の敷地を東西に分けている。西側の塀は築地塀の南雨落ち溝の12m（40尺）南で西へ曲がる（塀1）。この塀1と築地塀との間は西へ続く通路となる。西北ブロックの北辺から出入りして北門へ向かうための通路であろうか。東北ブロックにはこれに対応するものはない。西北ブロックでは今までの調査で計6棟の建物が発見されている。規模、柱穴とも大型のものが目立つが、主殿風の建物はなく、棟数も少なく、南の中樞ブロックとは性格を異にしていたことは明かである。建物7の様な構造（3間x1間：10x3.5mの東西棟2棟を7間：21mの南北塀でつなぐ）のものは初めて発見されたが、その性格の限定は今後の課題である。

その他の建物多くはB期（奈良時代中期）、C期（奈良時代後期）、D期（奈良時代後期）の建物ということになるが、柱穴出土土器・瓦と建物の配置の厳密な検討は現在進行中であり、所属時期の限定は機会を改めて報告したい。ただし、一坪では正殿風の建物は今のところ見つかっておらず、庇付き建物も二、七坪に比べて少ない。

### ②長岡京遷都後の遺構

築地の南雨落ち溝の埋没後に東西約5m（2間）、南北約17m（7間）の建物1と東西12m（3間）以上、南北5m（2間）の建物が建てられる。また、北雨落ち溝上では築地の瓦が落下した状態で検出されている（第200次調査区で顕著）。

築地の屋根の規模、瓦の葺足、瓦の再利用率などの貴重な研究資料となる。

## 3. いわゆる二条大路南側溝と出土木簡について

いわゆる二条大路南側溝：197次東区の概要報告でも指摘したが、これを二条大路南側溝と認定するに当たってはいくつかの問題がある。その名称も含めた結論は第200次調査の終了を待って下すとして、便宜的にその名称を継続して使用する。197次東区の調査では北門、坪境小路の北側にあたる部分で溝が途切れる。明らかに南からの出入りを意識した途切れ方である。これが東二坊々間路西側溝に注ぐであろうと推定されていたが、2月の193次B区補足調査で東二坊々間路西側溝の手前約1mのところまで外堀のように途切れることが判明した。規模は開口部幅約3m、溝底幅約2m、深さ約1mで、壁は急角度で立ち上がる。こうした規模の溝が八坪の北に東西約120mにわたって延びている。溝の堆積物は、下層に薄い砂層があり、中層に大量の木簡を含む木屑層があり、上層に溝全体を覆う土層がある（図4）点で東西ともに対応する。

第197次西区の調査の結果、一坪北にはこれに対応する溝は存在しないことが判明した。これは敷地の西端の東一坊大路寄りの第32次調査の結果とも一致する。この溝は八坪北にだけ存在したのである。

木簡について：今回の報告は既発掘分についてである（図6）。193次B区調査では約300点、197次東区調査では約500点の木簡が出土し、「長屋王家木簡」に次ぐ出土量となる。木簡に記された年紀は天平3～10年の間に限られ、とくに天平7年と8年に集中し、長屋王の死後、数年の頃の木簡といえる。共伴した土器の年代も天平初年以前のものである。

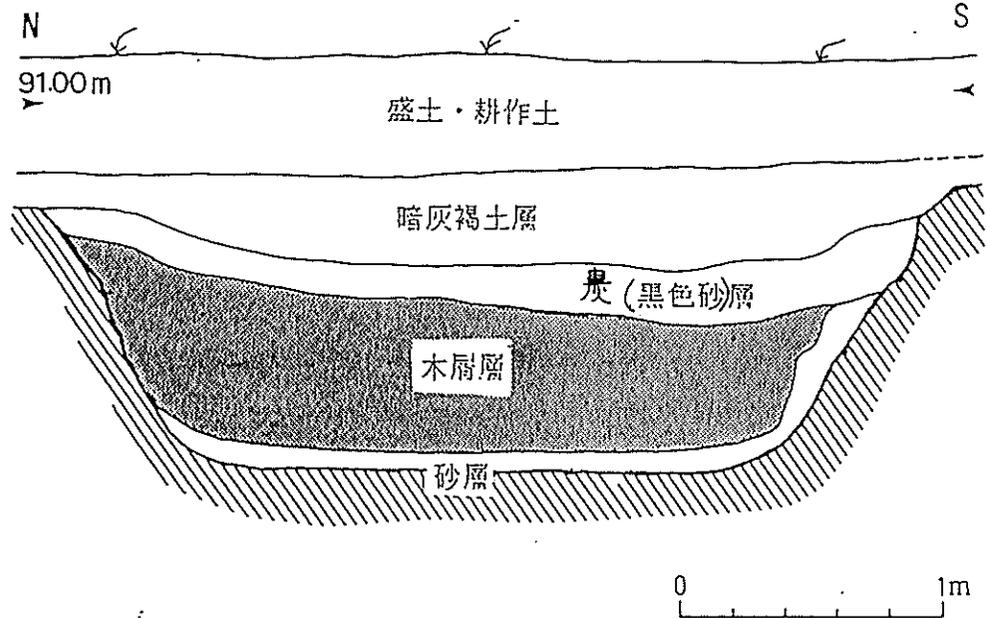
この溝の木簡の大きな特徴は、荷札の木簡が多いということである。中でも伊豆国と隠岐国から送られた海産物に付けられた調の荷札が多い。また、調以外では、贄の木簡が20点ほど出土しており、注目される。一般に贄とは、天皇家に対して捧げられる食品とされるから、それがまとまって出土するということは、この付近の性格を考える上で示唆を与えるものである。

その他、調・中男作物・贄などと並んで、「土毛」という税の種類を記した木簡が初めて出土したことや、大宰府から染料の紫草を運んだ木簡など、従来の荷札木簡に新たな資料を提供するものといえる。

前回の長屋王家木簡と比較してみると、多くの点で違いがみられ、今回の木簡はむしろ平城宮出土の木簡に極めて類似する。したがって、これらの木簡は個人

の邸宅というよりは、公的な施設の本館と考えるべきであろう。ただし、それが  
 どのような名称の施設であるのかは、200次調査の成果を待ち、さきにあげた  
 特徴と、この溝の性格とを総合して検討していかなければならない。

なお、これらの本館のほかに、黒帯土器、黒面土器、楡扇、冠帽なども出土し  
 ているが、特定の機関を限定するものではない。



いわゆる  
 図4 二条大路南側溝土層断面図

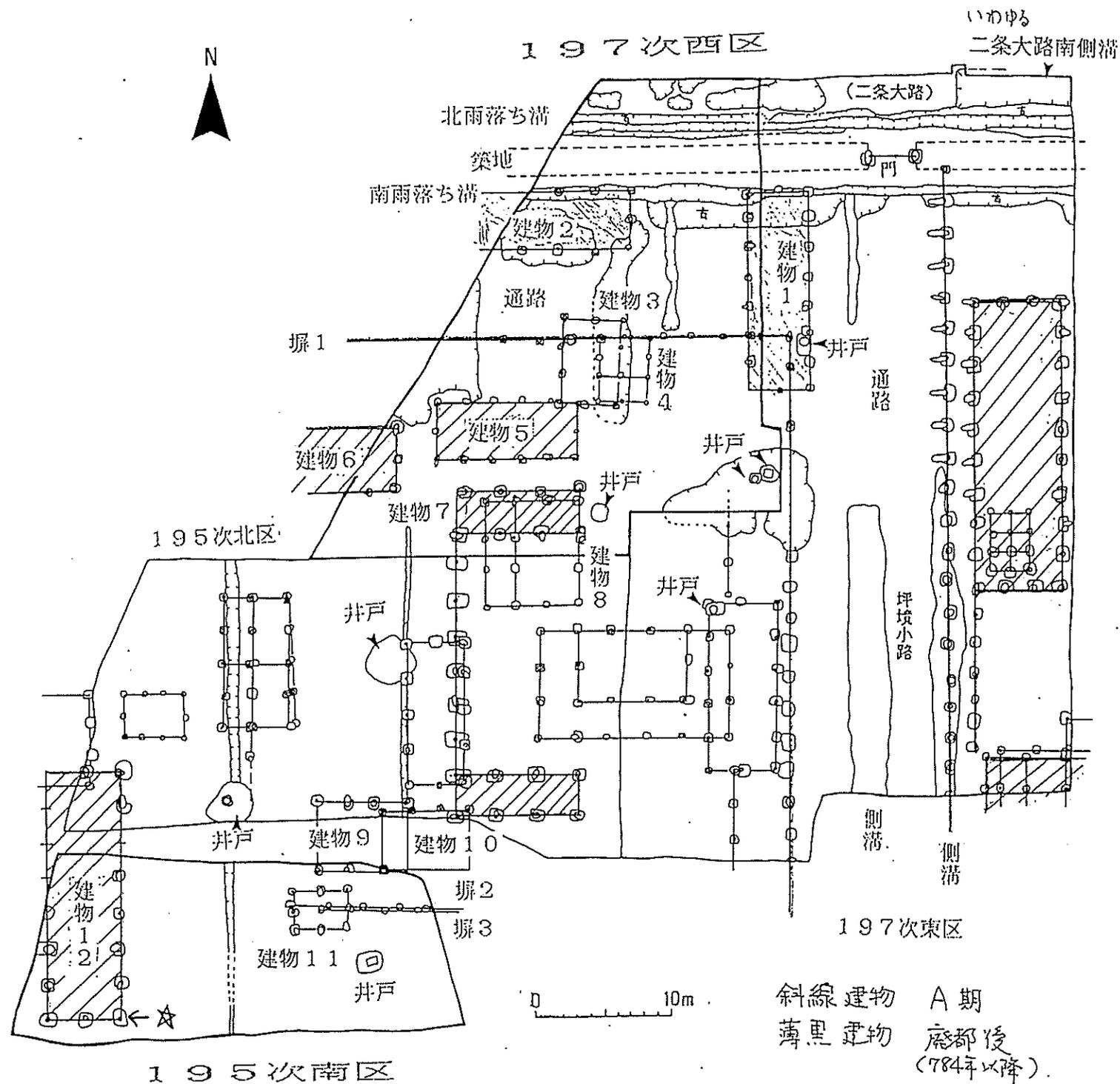
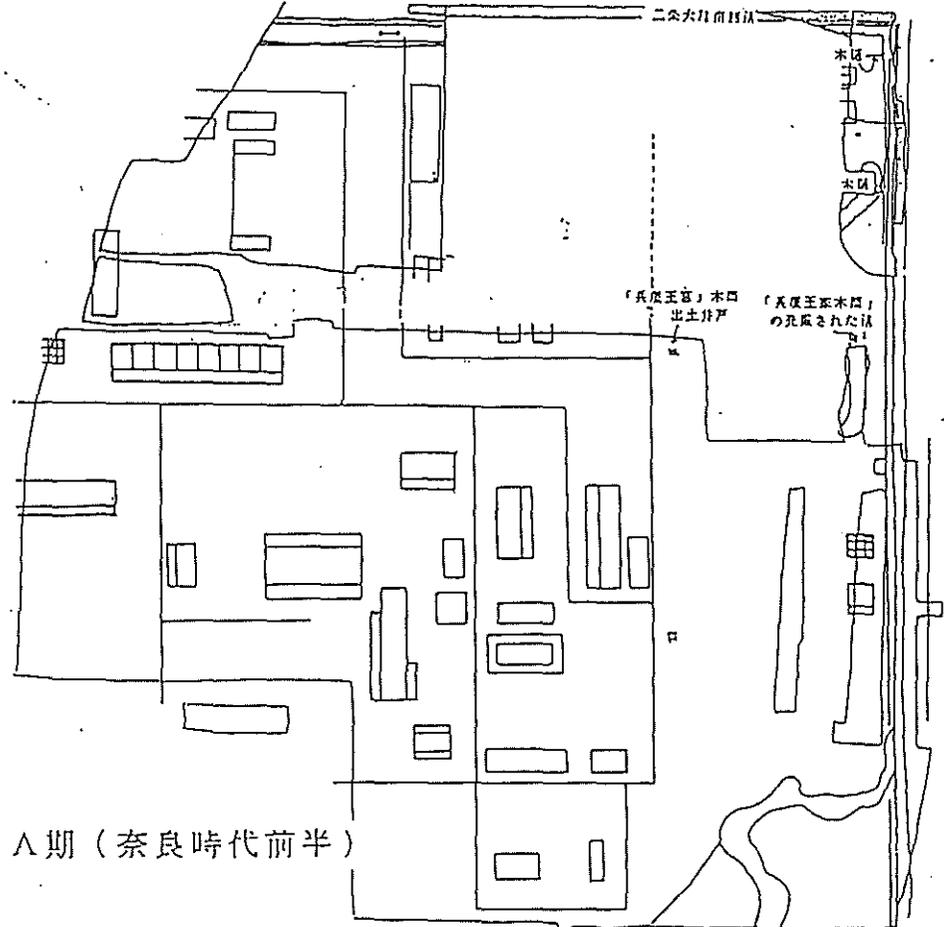
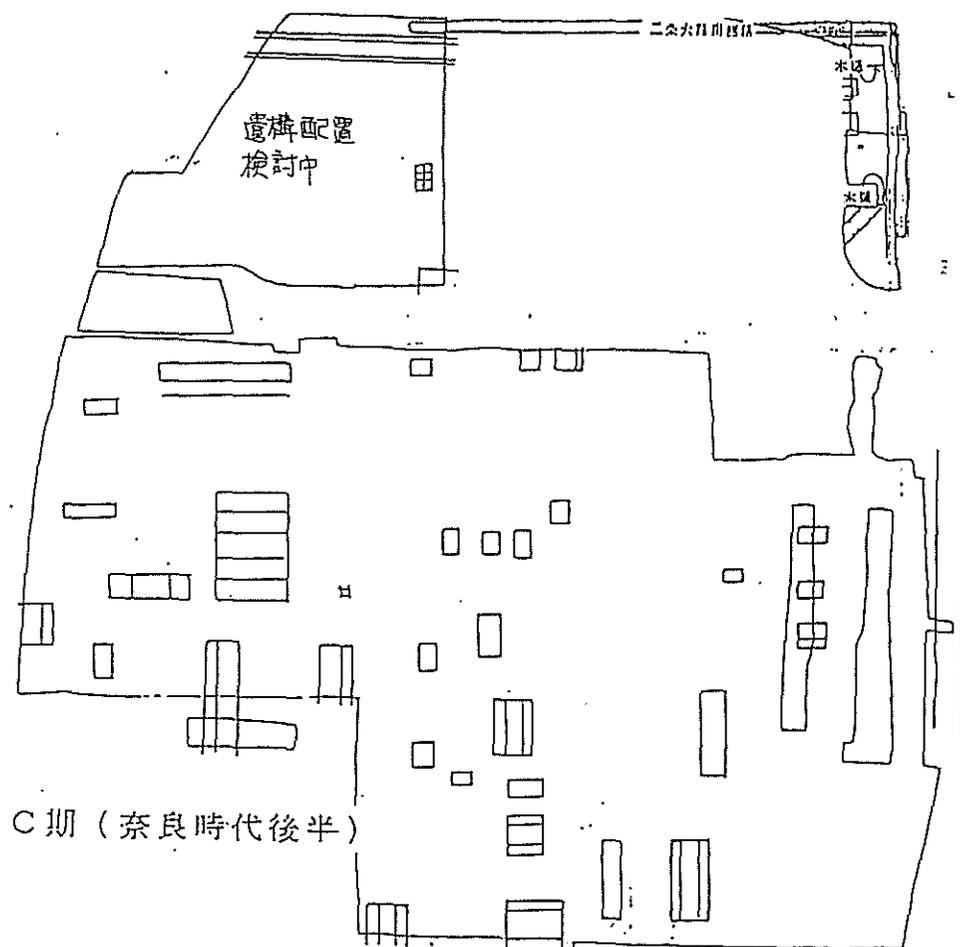


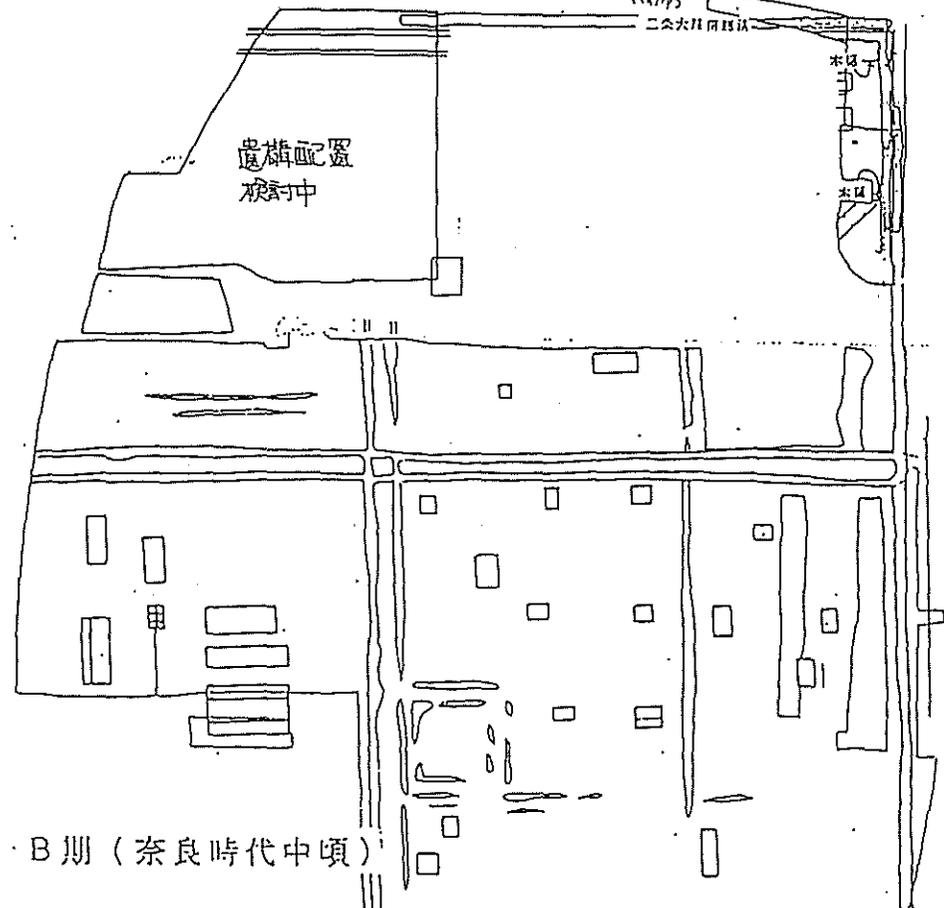
図3 195次南区、197次西区検出遺構



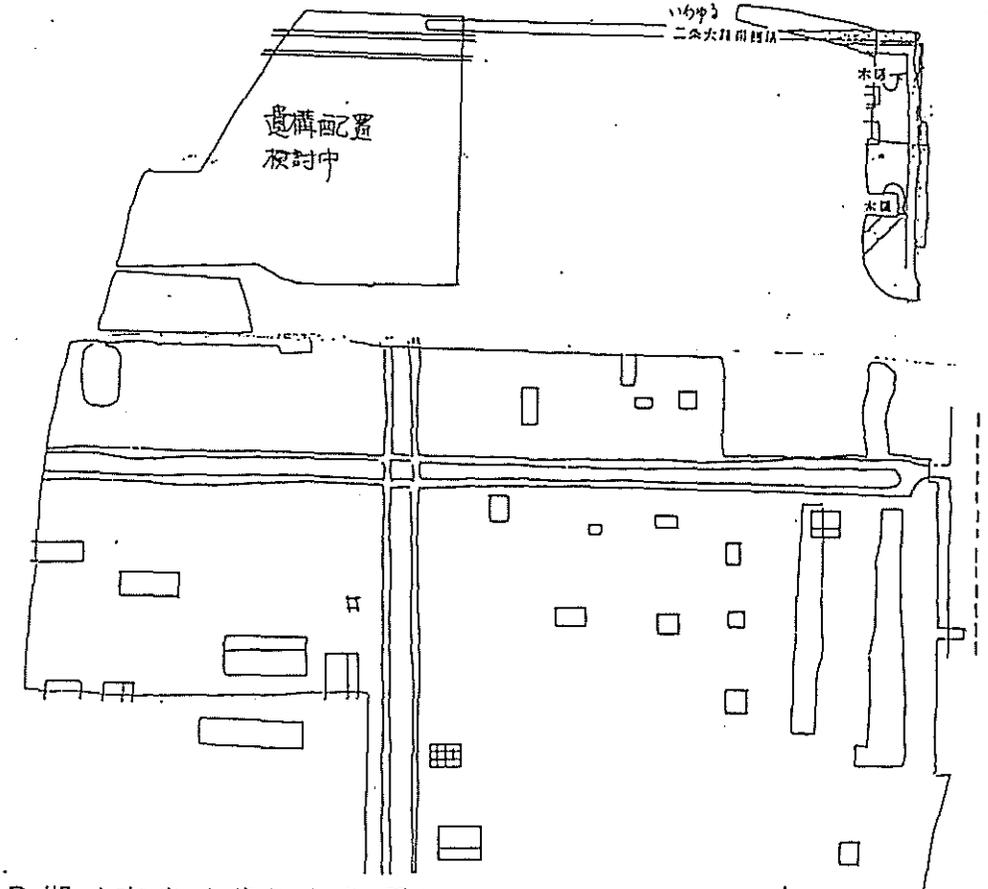
A期（奈良時代前半）



C期（奈良時代後半）



B期（奈良時代中頃）



D期（奈良時代終わり頃）

1. 伊豆国那賀郡人間郷壳良里戸主物部曾足口物部千嶋調堅魚十一斤十兩

十連三丸

天平七年九月

343・37・4 033

14 筑紫大宰進上筑前国徳波口

(74)・17・2 039

15 筑紫大宰進上肥後国詫麻郡口

(87)・18・2 039

六連六丸

2 伊豆国賀茂郡稲郷 郷稲 里戸主占部枝志戸占部石麻呂調荒堅魚十一斤十兩

天平七年十月 433・33・3 031

16 大宰進上肥後国詫麻郡殖種子紫口

(83)・18・3 081

17 麻郡殖種子紫草伍拾口 小口

(84)・18・3 081

3. 伊豆国田方郡妻妾郷許保里戸主穴人部君麻呂口穴人部宿奈麻呂調荒堅魚一斤十五兩

六連四節 372・34・4 031

18 筑紫大宰進上薩麻国殖口

(80)・17・2 039

天平七年十月

4 隱伎国周吉郡 新野郷丹志里宗我部 阿久多調烏賊六斤

天平七年 159・24・4 031

19 天平八年七月十六日残錢口一貫二百七十九文中鮭五隻直百文口乙猪知

口典又古鯖直五十文使五百嶋知熊毛十七日遺網曳二百文受少進宣熊毛又先用代料

五十文 高口年魚口之 知熊毛十八日智識料四百文知大春大夫熊毛八月九日鴨

百文 受穴人国足 又三羽直七十五文 受国足 宣口 十二日二百文 受飽 海宗女

四羽直 300・59・5 011

5 安房国安房郡公余郷長尾里 戸主大伴部忍麻呂 大伴部黒秦 饅調陸斤 陸拾貳條

天平七年十月 305・31・4 011

6 參河国播豆郡篠嶋海部供奉七月料御贖佐米楚割六斤

258・18・4 031

20 碗形五十口 直廿五文 大盤十口 廿七文

片盤百口 五十文 高环十口 廿七文

片坊五十口 廿文 足附大碗十口 廿八

8 伯耆国進上屈賀若海藻御贖

134・20・7 031

陶大碗四口 十二文 洗盤二 十一文

139・42・4 011

9 出雲国煮干年魚 御贖

203・(13)・3 039

10 八年八月以来 (題箋軸)

21 南落葉錦 蔽下白雲深

他郷菊花酒 漸慰失侶心

明明白白 白白諸譜

357・24・7 061

11 相模国蹴二斗

88・24・4 032

12 武蔵国足立郡土毛蓮子一斗五升

156・22・5 032

22 大宅里大穴 (檜扇)

280・33・7 031

13 志摩国中男作物饅腸五斤 天平八年七月十日



三條大路南側溝出土木簡釈文